

# 雁の童子

宮沢賢治

青空文庫



流沙の南の、楊<sup>やなぎ</sup>で囲<sup>かこ</sup>まれた小さな泉<sup>いのすみ</sup>で、私は、いつた麦粉<sup>むぎこ</sup>を水にといて、昼<sup>よ</sup>の食事<sup>しょくじ</sup>をしておりました。

そのとき、一人の巡礼<sup>じゅんれい</sup>のおじいさんが、やつぱり食事<sup>しょくじ</sup>のために、そこへやつてきました。私たちはだまつて軽<sup>かる</sup>く礼<sup>れい</sup>をしました。

けれども、半日まるつきり人にも出会<sup>であ</sup>わないそんな旅<sup>たび</sup>でしたから、私は食事がすんでも、すぐに泉とその年老<sup>としと</sup>つた巡礼<sup>じゅんれい</sup>とから、別れてしまいたくはありませんでした。

私はしばらくその老人<sup>ろうじん</sup>の、高い咽喉<sup>のどぼとけ</sup>のぎくぎく動<sup>うご</sup>くのを、見るともなしに見ていました。何か話し掛けたいと思いましたが、

どうもあんまり向うが寂かなので、私は少しきゆうくつにも思いました。

けれども、ふと私は泉のうしろに、小さな祠ほこらのあるのを見付けました。それは大へん小さくて、地理学者や探險家たんけんかならばちよつと標ひょうほん本もに持つて行けそうなものではありますましたがまだ全くあたらしく黄いろと赤のペンキさえ塗ぬられていかにも異様いように思われ、その前には、粗末そまつながら一本の幡はたも立つていました。

私は老人ろうじんが、もう食事も終りそうなのを見てたずねました。「失礼しつれいですがあのお堂どうはどなたをおまつりしたのですか。」

その老人も、たしかに何か、私に話しかけたくていたのです。だまつて二、三度うなずきながら、そのたべものをのみ下して、

低く言いました。

「……童子のです。」

「童子つてどう云う方ですか。」

「雁の童子と仰つしやるのは。」老人は食器をしまい、屈んで  
泉の水をすくい、きれいに口をそそいでからまた云いました。

「雁の童子と仰つしやるのは、まるでこの頃あつた昔ばなしのよう  
うなのです。この地方にこのごろ降りられました天童子だとい  
うのです。このお堂はこのごろ流沙の向う側にも、あちこち建つ  
ております。」

「天のこどもが、降りたのですか。罪があつて天から流されたの  
ですか。」

「さあ、よくわかりませんが、よくこの辺へんでそう申もうします。多分  
そうでございましょう。」

「いかがでしよう、聞かせて下さいませんか。お急ぎでさえなか  
つたら。」

「いいえ、急ぎはいたしません。私の聴きいただけお話いたしまし  
ょう。

沙車さしゃに、須利耶圭すりやけいという人がございました。名門めいもんではござい  
ました。そうですが、おちぶれて奥おくさまと二人、ご自分は昔むかしからの  
写しゃきよう 経きょうをなさり、奥おくさまは機はたを織おつて、しづかにくらしていら  
れました。

ある明方あけがた、須利耶さまが鉄砲てつぱうをもつたご自分の従弟いとこのかた

とご一緒に、野原を歩いていられました。地面はごく麗わしい青い石で、空がぼうつと白く見え、雪もま近でございました。

須利耶さまがお従弟さまに仰おつしやるには、お前もさような慰なぐさみの殺せつ生しようを、もういい加減かげんやめたらどうだと、斯こうでございました。

ところが従弟の方が、まるですげなく、やめられないと、ご返へ事ことです。

(お前はずいぶんむごいやつだ、お前の傷いためたり殺ころしたりするものが、一体どんなものだかわかつているか、どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ。)と、須利耶さまは重かさねておさとしになりました。

(そうかもしないよ。けれどもそうでないかもしない。そうだとすればおれは一層いつそうおもしろいのだ、まあそんな下らない話はやめろ、そんなことは昔の坊主ぼうずどもの言うこつた、見ろ、向うを雁かりが行くだろう、おれは仕止しとめて見せる。)と従弟のかたは鉄砲つぽうを構かまえて、走つて見えなくなりました。

須利耶さまは、その大きな黒い雁の列れつを、じつと眺ながめて立たれました。

そのとき俄かに向むこうから、黒い尖とがつた弾丸だんがんが昇のぼつて、まつ先きの雁の胸むねを射ました。

雁は二、三べん揺らぎました。見る見るからだに火が燃え出し、世にも悲しく叫さけびながら、落ちて参まいつたのでござります。

弾丸がまた昇つて次の雁の胸をつらぬきました。それでもどの雁も、遁げはいたしませんでした。

却つて泣き叫びながらも、落ちて来る雁に隨いました。

第三の弾丸が昇り、

第四の弾丸がまた昇りました。

六発の弾丸が六足の雁を傷つけまして、一ばんしまいの小さな一足だけが、傷つかずに残つていたのでございます。燃え叫ぶ六足は、悶えながら空を沈み、しまいの一足は泣いて隨い、それでも雁の正しい列は、決して乱れはいたしません。

そのとき須利耶さまの愕ろきには、いつか雁がみな空を飛ぶ人の形に<sup>かわ</sup>つておりました。

赤い焰に包まれて、歎き叫んで手足をもだえ、落ちて参る五人、それからしまいに只一人、完いものは可愛いらしい天の子供でございました。

そして須利耶さまは、たしかにその子供に見覚えがございまして。最初のものは、もはや地面に達します。それは白い鬚の老人で、倒れて燃えながら、骨立った両手を合せ、須利耶さまを拝むようにして、切なく呼びますのには、

(須利耶さま、須利耶さま、おねがいでございます。どうか私の孫をお連れ下さいませ。)

もちろん須利耶さまは、馳せ寄つて申されました。(いいとも、いいとも、確かにこれが引き取つてやろう。しかし一体お前らは、

どうしたのだ。）そのとき次々に雁が地面に落ちて来て燃えました。大人もあれば美しい瓔珞をかけた女子もございました。その女子はまつかな焰に燃えながら、手をあのおしまいの子にのばし、子供は泣いてそのまわりをはせめぐつたと申します。雁の老人が重ねて申しますには、

（私共は天の眷属でございます。罪があつてただいままで雁の形を受けておりました。只今報いを果しました。私共は天に帰ります。ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは縁のあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てを願います。おねがいでございます。）と斯うでございます。

須利耶さまが申されました。

(いいとも。すっかり判つた。引き受けた。安心してくれ。)

すると老人は手を擦つて地面に頭を垂れたと思うと、もう燃えつきて、影もかたちもございませんでした。須利耶さまも従弟さまも鉄砲をもつたままぼんやりと立つていられましたそうでいつたい二人いつしょに夢を見たのかとも思われましたそうですがあとで従弟さまの申されますにはその鉄砲はまだ熱く弾丸は減つておりそのみんなのひざまずいた所の草はたしかに倒れておつたそうでございます。

そしてもちろんそこにはその童子どうじが立つていられましたのです。

須利耶さまはわれにかえつて童子に向つて云われました。

(お前は今日きょうからおれの子供だ。もう泣かないでいい。お前の前

のお母さんかあや兄さんたちは、立派な國に昇つて行かれた。さあおいで。）

須利耶さまはごじぶんのうちへ戻られました。途中の野原は青い石でしんとして子供は泣きながら隨いて参りました。

須利耶さまは奥さまとご相談で、何と名前をつけようか、三、四日お考えでございましたが、そのうち、話はもう沙車全体にひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼びましたので、須利耶さまも仕方なくそう呼んでおいででございました。」

老人はちよつと息を切りました。私は足もとの小さな苔を見ながら、この怪しい空から落ちて赤い焰につつまれ、かなしく燃えて行く人たちの姿を、はつきりと思い浮べました。老人はしば

らく私を見ていましたが、また語りつけました。

「沙車の春の終りには、野原いちめん楊の花が光つて飛びます。

遠くの氷の山からは、白い何とも云えず瞳を痛くするような光が、

日光の中を這つてまいります。それから果樹がちらちらゆすれ、

ひばりはそらですきとおつた波をたてます。童子は早くも六つ

になられました。春のある夕方のこと、須利耶さまは雁から來た

お子さまをつれて、町を通つて参られました。葡萄いろの重い雲

の下を、影法師の蝙蝠がひらひらと飛んで過ぎました。

子供らが長い棒に紐をつけて、それを追いました。

(雁の童子だ。雁の童子だ。)

子供らは棒を棄て手をつなぎ合つて大きな環になり須利耶さま

親子を囮かこみました。

須利耶さまは笑わらつておいででございました。

子供そろらは声を揃そろえていつものようにはやします。

(雁の子、雁の子雁童子、

空から須利耶におりて來た。)と斯こうでござります。けれども一人の子供が冗談じょうだん もうに申しますには、

(雁のすてご、雁のすてご、

春になつてもまだ居いるか。)

みんなはどつと笑いましてそれからどう云うわけか小さな石が一つ飛とんで来て童子の頬ほおを打ちました。須利耶さまは童子をかばつてみんなに申されますのには、

おまえたちは何をするんだ、この子供は何か悪いことをしたか、  
冗談にも石を投げるなんていけないぞ。

子供らが叫んでばらばら走つて来て童子に詫びたり慰めたりいたしました。或る子は前掛けの衣嚢から干した無花果を出して遣ろうといたしました。

童子は初めからお了しまでにこにこ笑つておられました。須利耶さまもお笑いになりみんなを赦して童子を連れて其處をはなれなさいました。

そして浅黄の瑪瑙の、しづかな夕もやの中でいわれました。

(よくお前はさつき泣かなかつたな。) その時童子はお父さまにすがりながら、

（お父さんわたしの前のおじいさんはね、からだに弾丸をからだに七つ持つていたよ。）と斯う申されたと伝えます。」

巡礼の老人は私の顔を見ました。

私もじつと老人のうるんだ眼を見あげておりました。老人はまた語りつけました。

「また或る晩のこと童子は寝付けないでいつまでも床の上でもがきなさいました。（おつかさんねむられないよう。）と仰つしやりまする、須利耶の奥さまは立つて行つて静かに頭を撫でておやりなさいました。童子さまの脳はもうすっかり疲れ、白い網のようになつて、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんだり、そのへん一杯にぜんまいの芽のようなものが見えたり、

また四角な変に柔らかな白いものが、だんだん拡がつて恐ろしい大きな箱になつたりするのでございました。母さまはその額が余り熱いといつて心配なさいました。須利耶さまは写しあけの経文に、掌を合せて立ちあがられ、それから童子さまを立たせて、紅革の帯を結んでやり表へ連れてお出になりました。駅のどの家ももう戸を閉めてしまつて、一面の星の下に、棟々が黒く列びました。その時童子はふと水の流れる音を聞かれました。そしてしばらく考えてから、

(お父さん、水は夜でも流れるのですか。) とお尋ねです。須利耶さまは沙漠の向うから昇つて来た大きな青い星を眺めながらお答えなされます。

(水は夜でも流れるよ。水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかつたら、いつまでもいつまでも流れるのだ。)

童子の脳は急にすっかり静まって、そして今度は早く母さまの処にお帰りなりとうなります。

(お父さん。もう帰ろうよ。)と申されながら須利耶さまの袂を引つ張りなさいます。お二人は家に入り、母さまが迎えなされて戸の環を嵌めておられますうちに、童子はいつかご自分の床に登つて、着換えもせずにぐつすり眠つてしまわれました。

また次のようなことも申します。

ある日須利耶さまは童子と食卓にお座りなさいました。食品の中に、蜜で煮た二つの鮒がございました。須利耶の奥さまは、

一つを須利耶さまの前に置かれ、一つを童子にお与えなされました。

(喰べたくないよおつかさん。) 童子が申されました。(おいし  
いのだよ。どれ、箸をお貸し。)

須利耶の奥さまは童子の箸をとつて、魚を小さく碎きながら、  
(さあおあがり、おいしいよ。) と勧められます。童子は母さま  
の魚を碎く間、じつとその横顔を見ていましたが、俄かに  
胸が変な工合に迫つてきて氣の毒なような悲しいような何とも堪  
らなくなりました。くるつと立つて鉄砲玉のように外へ走つて  
出られました。そしてまつ白な雲の一ぱいみに充ちた空に向つて、  
大きな声で泣きました。まあどうしたのでしよう、と須利耶

の奥さまが愕おどろかれます。どうしたのだろう行つてみろ、と須利耶さまも気づかわれます。そこで須利耶の奥さまは戸口にお立ちになりましたら童子はもう泣きやんで笑つていられましたとそんなことも申し伝えます。

またある時、須利耶さまは童子をつれて、馬市うまいちの中を通られましたら、一疋の仔馬ひき こうまが乳ちちを呑んでおつたと申します。黒い粗布の 布を着た うましょうにん馬商人うましょうにんが来て、仔馬を引きはなしもう一疋の仔馬に結びつけ、そして黙だまつてそれを引いて行こうと致いたします。母親の馬はびっくりして高く鳴きました。なれども仔馬はぐんぐん連れて行かれます。向うの角かどを曲まがろうとして、仔馬は急いで後肢とあしを一方あげて、腹の蠅はら はえを叩たたきました。

童子は母馬の茶いろな瞳ひとみを、ちらつと横眼よこめで見られましたが、俄かに須利耶さまにすがりついて泣き出されました。けれども須利耶さまはお叱しかりなさいませんでした。ご自分の袖そでで童子の頭をつつむようにして、馬市を通りすぎてから河岸かわぎしの青い草の上に童子を座すわらせて杏あんずの実みを出しておやりになりながら、しづかにおたずねなさいました。

（お前はさつきどうして泣いたの。）

（だつてお父さん。みんなが仔馬をむりに連れて行くんだもの。）  
（馬は仕方しかたない。もう大きくなつたからこれからひとりで働くくん  
だ。）

（あの馬はまだ乳を呑んでいたよ。）

(それはそばに置いてはいつまでも甘えるから仕方ない。)

(だつてお父さん。みんながあのお母さんの馬にも子供の馬にもあとで荷物を一杯つけてひどい山を連れて行くんだ。それから食べ物がなくなると殺して食べてしまうんだろう。)

須利耶さまは何気ないふうで、そんな成人のようなことを云うもんじやないとは仰つしやいましたが、本統は少しその天の子供が恐ろしくもお思いでしたと、まあそう申し伝えます。

須利耶さまは童子を十二のとき、少し離れた首都のある外道の塾にお入れなさいました。

童子の母さまは、一生けん命機はたを織つて、塾じゅく料りょうや小遣こづかいやらを拵こしらえてお送おくりなさいました。

冬が近くて、天山はもうまつ白になり、桑の葉が黄いろに枯れ  
てカサカサ落ちました頃、ある日のこと、童子が俄かに帰つてお  
いでです。母さまが窓から目敏く見付けて出て行かれました。

須利耶さまは知らないふりで写経を続けておいでです。

(まあお前は今ごろどうしたのです。)

(私、もうお母さんと一緒に働くこうと思ひます。勉強し

ている暇はないんです。)

母さまは、須利耶さまのほうに気兼ねしながら申されました。

(お前はまたそんなおとのようなことを云つて、仕方ないでは  
ありませんか。早く帰つて勉強して、立派になつて、みんな  
の為(ため)にならないとなりません。)

(だつておつかさん。おつかさんの手はそんなにガサガサしているのでしよう。それなのに私の手はこんななんでしょう。)

(そんなことをお前が云わなくともいいのです。誰だれでも年を老れば手は荒あれます。そんなことより、早く帰つて勉強をなさい。お前の立派になることばかり私には樂たのしみなんだから。お父さんがお聞きになると叱しかられますよ。ね。さあ、おいで。)と斯こう申されます。

童どうじ子はしょんぼり庭にわから出られました。それでも、また立ち停どまつてしまわれましたので、母おさまも出て行かれてもつと向むかうまでお連れになりました。そこは沼地ぬまちでございました。母おさまは戻もどうとしてまた(さあ、おいで早く。)と仰おつしやつたのでしたが

童子はやつぱり停まつたまま、家の方をぼんやり見ておられます  
ので、母さまも仕方なくまた振り返つて、蘆を一本抜いて小さな  
笛ふえをつくり、それをお持もたせになりました。

童子はやつと歩き出されました。そして、遙かに冷たい縞はるつめをつ  
くる雲のこちらに、蘆がそよいで、やがて童子の姿すがたが、小さく小  
さくなつてしまわれました。俄にわかに空を羽音すずめがして、雁かりの一列いちれつ  
が通りました時、須利耶さまは窓まどからそれを見て、思わずどきつ  
となされました。

そうして冬に入りましたのでございます。その厳しい冬が過ぎ  
ますと、まず楊やなぎの芽めが温和おとなしく光り、沙漠には砂糖水さとうみずのような  
陽炎かげろうが徘徊はいかいいたします。杏あんずやすももの白い花が咲さき、次で

は木立こだちも草地さおもまつ青になり、もはや玉髓ぎょくすいの雲の峯みねが、四方の空を繞めぐる頃ころとなりました。

ちょうどそのころ沙車の町はずれの砂すなの中から、古い沙車大寺のあとが掘ほり出されたとのことでございました。一つの壁かべがまだそのまで見附けられ、そこには三人の天童子が描えがかれ、ことにその一人はまるで生きたようだとみんなが評ひょうばん判ばんしましたそうです。或あるよく晴れた日、須利耶さまは都みやこに出られ、童子の師ししょ匠たくを訪たずねて色々礼れいを述べ、また二卷みまきの粗布あらぬのおくを贈おくり、それから半日、童子を連れて歩きたいと申されました。

お二人は雑沓ざつとうの通りを過ぎて行かれました。  
須利耶さまが歩きながら、何気なく云われますには、

(どうだ、今日の空きょう碧あおいことは、お前がたの年は、丁ちよ度うど今あ  
のそらへ飛とびあがろうとして羽をばたばた云いわせて いるようなも  
のだ。)

童子どうじが大へんに沈しづんで答えられました。

(お父さん。私はお父さんとはなれてどこへも行きたくあります  
ん。)

須利耶すりやさまはお笑わらいになりました。

(勿論もちろんだ。この人の大きな旅たびでは、自分だけひとり遠い光の空  
へ飛び去さることはいけないのだ。)

(いいえ、お父さん。私はどこへも行きたくありません。そして  
誰だれもどこへも行かないでいいのでしょうか。) とこう云ふう不思議ふしぎ

なお尋ねでございます。

（誰もどこへも行かないでいいかつてどう云うことだ。）

（誰もね、ひとりで離れてどこへも行かないでいいのでしようか。）

（うん。それは行かないでいいだろう。）と須利耶さまは何の気もなくほんやりと斯うお答えでした。

そしてお二人は町の広場を通り抜けて、だんだん郊外に来られました。沙がずうつとひろがつておりました。その砂が一ところ深く掘られて、沢山の人がその中に立つてございました。お二人も下りて行かれたのです。そこに古い一つの壁がありました。色はあせてはいましたが、三人の天の童子たちがかいてございま

した。須利耶さまは思わずどきつとなりました。何か大きい重いものが、遠くの空からばつたりかぶさつたように思われましたのです。それでも何気なく申されますには、

（なるほど立派なもんだ。あまりよく出来てなんだか恐いようだ。この天童はどこかお前に肖ていてるよ。）

須利耶さまは童子をふりかえりました。そしたら童子はなんだかわらつたまま、倒れかかっていられました。須利耶さまは愕ろいて急いで抱だき留められました。童子はお父さんの腕の中で夢のようにつぶやかれました。

（おじいさんがお迎いをよこしたのです。）

須利耶さまは急いで叫ばれました。

(お前どうしたのだ。どこへも行つてはいけないよ。)

童子が微かに云われました。

(お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前に  
お父さんが書いたのです。そのとき私は王の……だつたのですが  
この絵ができてから王さまは殺されわたくしどもはいつしょに出  
家したのでしたが敵王がきて寺を焼くとき二日ほど俗服を  
着てかくれているうちわたくしは恋人があつてこのまま出家に  
かえるのをやめようかと思つたのです。)

人々が集つて口々に叫びました。

(雁の童子だ。雁の童子だ。)

童子はも一度、少し唇をうごかして、何かつぶやいたようでご

ざいましたが、須利耶さまはもうそれをお聞きとりなさらなかつたと申します。

私の知つておりますのはただこれだけでござります。」

老人はもう行かなければならぬようでした。私はほんとうに名残り惜しく思い、まつすぐに立つて合掌して申しました。「尊いお物語ものがたり」をありがとうございました。まことにお互たがいい、ちよつと沙漠さばくのへりの泉いずみで、お眼めにかかる、ただ一時を、一緒に過よごしただけではございますが、これもかりそめのことではないと存じます。ほんの通りかかりの二人の旅人たびびととは見えますが、実はお互たがいがどんなものかもよくわからないのでございます。いずれはもろともに、善逝スガタの示しめされた光の道を進すすみ、かの無上むじょう

菩ぼだい提いたに至いたることでござります。それではお別わかれいたします。さ  
ようなら。」

老人は、黙だまつて礼れいを返かえしました。何か云いいたいよういうでしたが黙だま  
つて俄にわかに向むこうを向むき、今まで私の來た方の荒あれち地ちにとぼとぼ歩あるき  
出でしました。私もまた、丁ちよ度うどその反はん対たいの方の、さびしい石原  
を合掌あわせたてしたまま進すすみました。



# 青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月20日再版

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月発行

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年7月26日公開

2007年8月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 雁の童子

## 宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>